



大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ 4

α L P H α L I G H T

さとう
Satou



アルファライト文庫





ギーナ

マーメイド族の女性。
細かいことは
気にしないタイプ。

シルメリア

銀猫族のリーダー的
存在。アシュトを主人
として傍に仕える。

シェリー

アシュトの妹。
「氷姫」の異名を持つ、
元王国最強の
魔法師。

エルミナ

希少種族ハイエルフの
美少女。どう見えて
大のお酒好き。

ウッド

アシュトの魔法で
生み出された植木。
アシュトが大好き！

アシュト

本作の主人公。
魔法適性が「植物」だった
ために家を追放され、
魔境オーベルシュタインの
領主となる。

ミュディ

優しく家庭的な
アシュトの幼馴染。
魔法適性は「爆破」。

アルラウネ

物静かな薬草少女。
マンドレイクに比べると
寒いのは苦手……

マンドレイク

活発な薬草少女。
寒くても元気に
外で遊ぶ。

CHARACTERS
主な登場人物

第一章 ハイエルフの里へ

俺の名前はアシュト。ビッグバロッグ王国の名門貴族、エストレイヤ家の次男……だった。今は除籍じよせきされて貴族ではなくなっちゃけど、未開の地オーベルシュタインに住む希少種族たちを集めて（というか、勝手に集まった）みんな仲良く暮くらしている。

最近の出来事で大変だったのは、ドラゴンロード王国のお姫様であるローレライとクラベルの父、つまり国王のガールランド様が俺と戦うために村を訪れたことかな。あと、ワーウルフ族という人と狼の姿を持つ種族を伝染病から救ったり、ディアボロス族の長ルシファールと友人になったり……いろいろあったなあ。

そんな数々の事件を乗り越え、俺にも弟子でしができた。

ワーウルフ族の少年フレキくん。まさか俺が師匠ししょうになるとは……ははは。

住人が続々と増え、ここも村らしくなった。

村の名前も「緑龍りよくりゅうの村」に決まり、ようやく箔はくが付いたような気がする。

とはいえ、何かが劇的げきてきに変わるわけじゃない。住人たちはいつもと同じ仕事をしている。最近では、ガールランド様が連れてきた龍騎士たちが、村とその周囲の警護けいごをするように

なった。

宿舎と龍厩舎りゆうぐしやの建設も急ピッチで進められている。ドラゴンたちのエサはデーモンオーガのバルギルドさんたちが狩り、生肉をそのままモグモグ食べさせていた。

不思議なことに、飼い主にしか懐かないはずのドラゴンは、サラマンダー族によく懐いた。これには龍騎士も驚き、サラマンダーたちの願いもあつて世話を任せることにしたそうだ。

その間、龍騎士たちは訓練を行っている。

住人たちともすぐに打ち解け、何人かの龍騎士はハイエルフの女性陣といい雰囲気かんいきになつてるとか。まあ、恋愛は個々の自由だよね。

さて、俺も大事な用事を済ませなくては。

用事とはもちろん……折れた杖の代わりをなんとかすることだ。

シエラ様からももらった材料で、ハイエルフの長であるジークベッグさんに依頼する。

前もって手紙を送ったら、いつでも来てくれとのこと。

ディアボロス族やハイエルフは杖がなくても魔法を使えるが、人間はそうはいかない。

自分に合ったものを使わないと、思った通りの魔法は使えない。そのため、杖職人に専用の杖を仕立ててもらうのが普通だ。まさかジークベッグさんが職人だとは思わなかったけどな。

というわけで、久しぶりにハイエルフの里へ向かうことにした。



ハイエルフの里へ向かうメンバーは、俺、ハイエルフのエルミナ、フェンリルのシロ、植木人のウッド、フレキくん、積荷の荷下ろしをするハイエルフ数名とサラマンダー族数名だ。

シロは久しぶりに兄妹に会わせてやりたいし、フレキくんはフェンリルを神聖視していたから、シロの親に会わせて驚かせたい。ウッドは友達として同行し、ジークベッグさんの孫のエルミナは向こうが会いたいと言っていたので一緒に行くことになった。

「センチ、よろしくな」

『お任せを!!』

「……なあお前、なんかまた伸びてないか？」

『メシが美味いと身体が伸びるみたいやで!!』

大ムカデのセンチの身体が、また伸びていた。

身体に括り付けられる箱が最初は十五箱くらいだったのに、今や倍の三十箱取り付けている。

伸びすぎじゃないだろうか……まさか成長期？

すると、隣にいたエルミナが言う。

「アシュト、里にはどれくらい滞在するの？」

「んー……杖ができるまでかな。つまり未定だ」

「そっか。じゃあお酒をいっぱい持っていけないとね」

センチに括り付けた箱には、お土産の酒がいっぱい入っている。

几帳面なハイエルフのメージュと、徹底した農作物管理をするディアボロス族の文官、ディアーナのおかげで、加工品の生産量がアップしたのだ。ワインを仕込むためのブドウの量を均一にしたので、今や一切の無駄がない。

というかエルミナ……今までの管理が杜撰すぎだ。管理者を代えるだけでこうも変わるとは。

「……何よその目は」

「いや、別に。それより準備はできたのか？」

「私はオッケーよ」

そこにフレキくとウッド、シロが来た。

「お待たせしました師匠!! 遅れて申し訳ありません!!」

『アシュト、アシュト!!』

『きゃんきゃんっ!!』

よし、これでハイエルフの里へ行くメンバーは揃ったな。

荷物の積み込みが終わり、いつもセンチの護衛をしているデーモンオーガ、ダイヤモンドさんも来た。

「ふむ、村長が同行するのか……これは気合を入れねばな」

「い、いえ、いつも通りでお願いします」

ダイヤモンドさん、笑顔が怖い。

すると、彼はなぜか俺に近付いて小声で言う。

「村長、例の件だが……やはり駄目だろうか」

「……駄目です。というか今は魔法が使えませんし」

「ならば、杖の修理が終わったら、試し撃ちにでも」

「駄目です」

「むう……」

実は、ダイヤモンドさんだけでなく、バルギルドさんと同じお願いをしてくる。

内容はなんと……『ミストリギに絡む大蛇』を出してほしいというのだ。

なんでも、ガールランド王との戦いを見て、どうしても戦ってみたくなったのだとか。

杖が壊れる原因になった魔法だから、杖が直っても正直使いたくない。というかあれは

禁忌の魔法だし、よほどことがないと使うつもりはない。
とまあ、そんな感じで出発です。



相変^{あひか}わらず、センチの乗り心地^{こち}は最悪だった。

「う、げええ……きぼちわるい」

「わたしも……」

ハイエルフの里に到着した俺とエルミナは、ぐにやぐにやになった。

「ボクは平気でしたけど……大丈夫ですか、師匠？」

「アシユト、アシユト、ヘイキ？　ヘイキ？」

『きゃんきゃんっ!!』

ウツドやシロが酔^ようとは思わなかったけど、フレキくんが乗り物酔いしなかったのは意外だ。

とにかく……ようやくハイエルフの里に到着した。

「村長、荷の積み下ろしがあるからオレはここで手伝いをする。それから一度村に戻って、また来る。手土産はこちらに置いておこう」

「あ、ありがとうございます。ディآمدさん」

ちなみに手土産というのは、道中に現れた巨大トカゲだ。

普段は大剣を使つて狩るんだけど……今回のディآمدさん、素手^{すで}で殴^{なぐ}り殺しちゃったよ。どうも、ガーランド王とヨルムンガンドの戦いを見てから、デーモンオーガ一家がやる気になってるんだよねあ。

「じゃ、俺たちはジークベッグさんに挨拶^{あいさつ}しに行くか。エルミナ、大丈夫か？」

「な、なんとか……」

「ハイエルフの長かあ……あの本の作者に会うの、楽しみだなあ」

フレキくんがそんなことを言った。

フレキくんは、図書館に所蔵^{しよぞう}されている数々の本を書いたジークベッグさんに挨拶したのだから。まあフェンリルに会うのがメインらしいけどな。

ジークベッグさんに会うのは俺も久しぶりだ……今はどんな物語を書いているのかな。

『きゃんきゃんっ!!』

『アシユト、アシユト、アソビタイ、アソビタイ!!』

「ちよつと待ってろよ。挨拶したらフェンリルに会う許可をもらうから」

シロとウツドにそう言い、改めて周りを見渡す。

ハイエルフの里は、以前来た時とまったく変わっていなかった。

「そりゃ、変わるわけないでしょ。というか千年、二千年ほっちでも変わらないし」「そ、そうか？」

感想をエルミナに伝えたら、半眼で言われた。

さて、里のハイエルフたちに挨拶しながら、ジグベッグさんの家に向かう。

すぐに到着し、エルミナを先頭に中に入った。

「ただいま、おじいちゃん」

「失礼します」

「おおエルミナ、アシユト殿。遠路遙々ご苦勞様です」

そう言って迎えてくれたのは、メガネをかけたハイエルフの長老、ジグベッグさんだ。長い机に何枚もの羊皮紙を積んでいる。どうやら執筆中のようだ。

「お久しぶりです、ジグベッグさん」

「お久しぶりです、アシユト殿。本日は杖の件ですな？」

「はい。シエラ様から、ジグベッグさんは杖作りの達人だとうかがったので」

「ほっほっほ。いやあ、四十万年ほど前に杖作りにハマりましてな……十万年ほどのめり込んでしまいました」

「そ、そうですか……」

ギャグみたいな数字だが、百万歳を超えるジグベッグさんが言うなら本当なんだろう。

とりあえず、シエラ様からもらった材料を渡す。

「これが材料です。それと、手紙にも書きましたが……」

「ええ、ユグドラシルの枝ですな？ アシユト殿が言うのであれば、フェンリル様も文句は言わないでしょう。どうぞ持っていくてください」

「ありがとうございます。では、さっそく枝をもらいに行きます」

ここで、フレキくんがピクツと反応した。

フェンリルに会えるのを嬉しいと思いつつ、緊張しているのだろう。

「エルミナ、アシユト殿を案内して差し上げなさい」

「はい。それよりおじいちゃん、今日の夜は宴会だからね!! 美味しいお肉もあるし、期待してるから!!」

「わかっておるよ。まったく、お前という奴は……」

お肉とは、ディآمدさんが狩った巨大トカゲだろう。

杖作りにどれくらい日数が必要か知らないけど、今日は泊まりだろうな。

さて、久しぶりにフェンリルに会いに行くか。

ジグベッグさんの前を辞して、俺たちはハイエルフの里にあるユグドラシルへ向かった。

道中、フレキくんはガチガチになっていた。

「さき、緊張してきました……ふえ、フェンリル様に会える日が来るなんて……」
 「シロもフェンリルだけど？」

「その、シロ様を軽視^{けいし}してるわけではありませんが、文献^{ぶんけん}には巨大な白狼^{はくろう}とありましたので」

「まあ確かに……」

『さんさんつ!!』

シロは大きくなったけど、まだまだ子犬サイズだ。

ユグドラシルにいた親フェンリルは、全長十メートル以上あったしな。

「フェンリル元気かなあ〜」

エルミナはご機嫌^{きげん}だ。まあこいつは夜の宴会が楽しみなのかもしれないが。

ユグドラシルが見えてきたところで、前から白い子狼が走ってきた。

『さんさんつ!!』

『さーんつ!!』

『さやううんつ!!』

シロが飛び出し、前から来た子狼にタックルする。そして地面をゴロゴロ転^{ころ}がり、甘えるように互いの顔をペロペロ舐^なめた……やってきたのはシロの兄弟たちだ。

シロの兄弟も大きさはそれほど変わらない。成体まで成長するには時間がかかるのだ

ろう。

そして、ユグドラシルに到着……根元には、大きな白い狼が横になっていた。日光浴でもしてるのか、目を閉じて気持ちよさそうにしている。

『久しいな、アシュトよ』

こちらに気付いたのか、大狼——フェンリルが目を開け、話しかけてきた。フェンリルは人間の言葉を喋^{しゃべ}れるのだ。

「久しぶり。元気にしてたか？」

「ふ……歳^{とし}を取ると、そう簡単には変わらんよ……おお、久しいな娘よ」

『さんさんつ!!』

『エルミナ、お前も久しいな』

「久しぶり、フェンリル」

シロは、尻尾を振りながら母親に駆け寄^かって甘えた。

フェンリルも、シロの毛づくろいをしている。嬉しいのかな、やつぱり。しばらく毛づくろいをして、フェンリルは言った。

『して、なんの用だアシュト。娘を会わせに来ただけではあるまい』

「ああ、実はお願いがあつて来たんだ」

『ほう……申してみよ』

俺は杖の話をして、材料としてユグドラシルの枝が欲しいことを伝えた。

『なんだ、そんなことか。枝ならいくらでも持っていけ』

「え、いいのか？」

『かまわん。若い頃のジグベッグなど、毎日のように木に登っては枝を折って、持って帰っていたぞ』

「え、おじいちゃん、そんなことしてたの？」

目を丸くするエルミナ。

『ああ。若い頃の奴は杖作りに没頭^{ぼつとう}しててな……ハイエルフは杖などなくとも魔法が使えるのに、奇妙^{きみょう}なことをする奴だと笑ったわ。ジグベッグの作った杖は、人間の国に流れたな』

「そ、そうなんだ……」

あの爺^{じい}さん、多芸^{たぎ}すぎるよ。

フエンリルが長い尻尾を軽く振ると、ちょうどいい長さの枝がポトツと落ちてきた。カマイタチでも起こしたのだろうか。

『杖に使うのなら、それでいいだろう。持っていけ』

「ありがとう。あ、それと、お前に挨拶^{あいさつ}したいって子が……フレキくん？」

「……………」

フレキくんを見たら、緊張^{きんじやう}しすぎて立ったまま気絶^{きぜつ}していた。
揺さぶって起こしてやる。

「は、はじめまして!! ボクはワーウルフ族のフレキと申します!!」

気絶から回復したフレキくんは、人狼の姿になって跪^{ひざまず}く。

『人狼か。こうして見るのは随分^{ずいぶん}と久しぶりだ』

「おお、お会いできて光栄^{こうえい}ですっ!!」

『そうか。確かワーウルフ族は、我々フエンリルを慕^{した}ってくれているのだったな』

「は、はひっ」

『ふ、そう固くなるな、若き人狼よ。お前のことはジグベッグを通して聞いていた。アシウトのもとで学んでいるそうだな。しっかりと励^{はげ}めよ』

「は、は、はいいいっ!!」

フレキくん、感極^{かんごく}まりすぎて泣いちゃったよ。

まあ神様から『頑張^{がんば}れ』なんて言われたらやる気になるよなあ。

「じゃあフエンリル、帰りにまた寄るよ。シロは……うん、久しぶりに家族団欒^{だんらん}だな』

シロは、フエンリルに甘えまくっていた。

微笑^{ほほえ}ましいので、杖が完成するまでたっぷり甘えさせてやろう。

さて、材料も揃ったしジグベッグさんのところへ戻るか。

第二章 緑龍ムルシエラゴの杖

「おお、ユグドラシルの杖を持ってきましたな。では作業を始めましょう」
ジグベッグさんは執筆を中断し、杖作りを始めた。

意外にも、道具は少ない。俺の渡した材料と小さな手拭いだけだ。

「ふむ、素晴らしい素材ですな。ムルシエラゴ様の爪と鬘たふみ、そしてユグドラシルの枝」
ジグベッグさんは素手で枝を折り、爪と鬘を手拭いでよく磨く。

俺はたまらず質問した。

「あ、あの、道具は使わないんですか？」

「ええ。持論ですが、こういうのは全て人の手で行うのがいいですよ」

「へ、へえ……」

まあ、職人のやり方に口を挟むのはやめた方がいいか。

すると、エルミナが言う。

「ねえアシウト。時間かかるようだしさ、ちょっと一緒に来てよ」

「え、どこに？」

「フレキはフェンリルの話を聞くのに夢中だし、ウッドもフェンリルの子供たちと遊んでるし、私一人じゃ大変だから、あんたしかいないのよ」

「だから、どこに行くんだ？」

「実はさ、緑龍の村に移住したいってハイエルフたちがいっぱいいるのよね。そこでアシウトに選別してもらおうと、集会所にみんな集まってるの」

「ええ？ ハイエルフって、何人だよ」

「ざっと五十人。みんな女の子よ」

「……なんで俺が？」

「村長だから。ほら行くわよ」

「あつ、ちよつ」

俺はエルミナに引きずられ、ジグベッグさんの家を出た。ちくしょう、杖作りを見学しなかったのに。

エルミナに引きずられて集会所へ向かい、ハイエルフたちの面接をする。

結果、村に十五人のハイエルフを受け入れることになった。

人手が欲しかったからいいけど、こういうのはもう勘弁かんぺんしてほしい。

そうこうするうちに夜になり、歓迎会という名の宴会が始まった。

ハイエルフ料理と酒が振る舞われ、踊り子たちによる踊りや、男たちの余興よきうなど、大い

に盛り上がった。

ハイエルフ料理も美味しい。

山の幸がメインだが、見慣れないものも多くある。

中でも驚いたのは、この辺では見ない魚料理だった。

俺は、隣に座るエルミナに聞く。

「この魚、美味しいな」

「でしょ？ 川魚と違って海のお魚は大きいものばかりだからね。食べごたえもあるでしょ!!」

「海？ これ、海の魚なのか？」

すると、酔ってご機嫌なジグベッグさんが話に加わる。

「そういえば、アシユト殿の村では海の幸を取り扱ってませんな」

「まあ、そうですね」

「よろしければ、『マーメイド族』を紹介しようかな？ 彼らと海の幸の取引を行うというのはいかがでしょうか」

海の幸か……うん、欲しいな。

ジグベッグさんにお願ひして、海までの地図を書いてもらう。想像していたより、ここが海に近いことに驚いた。

「キングセンチピード……センチの足なら往復で一日ほどでしょう。それに、優秀な護衛もいらつしやる」

「これはこれは、ありがとうございます」

「いえいえ。こちらからマーメイド族に話を通しておきましょう。時間があつた時にでも訪ねてもらえれば」

「はい、わかりました」

その後、宴会は夜遅くまで続いた。

フレキくんは酒を飲んでグロッキー、そのまま集会所の別室に運ばれていった。

ウッドはフェンリルの家族と一緒にいるようだ。どうもフェンリルに気に入られたらしく、子狼たちと一緒に遊んでいる。

エルミナは……あれ、いつの間にかいない。

そして、宴会が終わって休むことに。

俺はジグベッグさんの家に泊まることになった。

使用人らしきハイエルフに、二階の一番奥の部屋を使うように言われ、階段を上がつてドアを開けた。

「はあ……うええ。飲みすぎたわ」

「え？」

ドアを開けると、エルミナがいた……す、素っ裸で。

「……え、エルミナ？」

「あ、アシユト……なな、なんで」

「い、いや、俺はその、この部屋を使えって」

エルミナはシャツで体を隠し、赤い顔で俺を睨む。

「ここは私の部屋よバカあああ……っ！！」

「すみませんでしたっ！！」

俺は慌てて部屋を出た。



「……………」

「だから、本当にここを使えって言われたんだよ！！」

「……………まあ、信じてあげる。どうせおじいちゃんのイタズラだろうし」

エルミナが服を着たので、改めて部屋に入り謝罪した。

エルミナは頬を膨らませていたが、なんとか許してもらった。

ジークベックさんのイタズラはともかく、結局俺はどこに泊まればいいんだ。

「なあ、俺の部屋は？」

「この家の二階は物置と私の部屋しかないわよ。おじいちゃんは一階だし」

「え……じゃあどうすんだよ」

「……仕方ないわね。特別にここで寝かせてあげてもいいわ」

「え」

「ただし、変なことしたら……」

「しないっつの！！」

というわけで、エルミナの部屋に泊めてもらうことになった。

さっきの手前恥ずかしかったが……忘れよう。

エルミナの部屋は、ものが少ない部屋だった。

切り株みたいなテーブルに、刺繍が施されたカーペット。あとはベッドと机と椅子、クローゼットがあるだけ。なんか、女の子らしくないな。

「ちよっと、人の部屋をジロジロ見ないでよ」

「わ、悪い」

怒られてしまった……とりあえず、話題を変えよう。

「あのさ、マーメイド族ってなんだ？」

「マーメイド族は海に住んでる種族よ。下半身が魚で、海底に町を作ってるの」

翌日。

ジグベッグさんの家の使用人が作った朝食を食べ、杖作りの続きを眺めた。

フレキくんは朝の挨拶をしてすぐにフェンリルのもとへ。ウッドはフェンリルのところへ行ったきり見てない。

エルミナは、里の果樹園に行ったようだ。今日は手伝いをするらしい。

俺は杖作りが気になったので、ジグベッグさんのところで見学していた。

「ふむ……こんなもんかの。ほれ、どうぞ」

「おお……」

昨日でほとんど完成していたのか、今日は最終調整だけのようだ。

ユグドラシルの枝を本体とし、魔力の通り道である芯にはシエラ様の鬘を用い、魔力を増幅させる核は、杖の柄尻に埋め込まれている。

長さは、以前の杖より少し長いな……でもしつくりくる。

軽く振ると、手によく馴染んだ。

「いいですね、最高にいいです」

「ふふ。素材が最高級ですからな。久しぶりに杖を作りましたが、まだまだ衰えておりません」

「すごいです、ありがとうございます!!」

「お役に立って何よりです。さーて、ワシは執筆に戻るとします。魔法の試し撃ちは裏で行うといいでしょう。不具合はないと思いますが、何かあったら言っていただければ」

「はい、わかりました」

家の裏に向かうと、広場になっていた。

とりあえず、簡単な魔法を使うか。

「よし、この雑草でいいや……『成長促進』」

チビな雑草に向けて『成長促進』を使用すると……

「つとと、ストップストップ!!」

あつという間に、庭が雑草だらけになってしまった。

すごい、前の杖より魔力がスムーズに流れていく。しかも消費魔力は前よりさらに少ない。

今までは一の魔力で十の効果を発揮していたが、この杖なら一の魔力で五十の効果を発揮できるだろう。

「これもシエラ様の素材とジグベッグさんの腕のおかげか……ありがとうございます」杖を抱き、俺はその場で頭を下げた。

すると、ジグベッグさんの家の使用人たちが俺を見ているのに気付いた。

ほんのりとジト目……あ、庭を荒らしたからか。
「も、申し訳ありません」

この日は、魔法を使わずに草むしりをした。



翌日。

用事が済んだので、村へ帰ることにした。

センチイが到着し、護衛にはバルギルドさんと息子のシンハくんがいる。見送りには、たくさんのハイエルフたちが来た。

センチイに乗って帰るのはエルミナと新しい住人のハイエルフたち、フレキくん、そして。

『きゃんきゃんっ!!』

『アシウト、アシウト!!』

シロとウッドだ。

後ろには、フェンリルとシロの兄弟たちがいる。

俺はしゃがみ、シロを抱きしめてワシワシ撫でる。

すると、シロの兄弟たちが飛びかかってきた。

「うわっ!？」

『きゃううーん』

『くうん』

『撫でてやってくれ。どうもアシウトのことを聞いたらしくてな、羨ましがっている』

「そ、そうなのか？ よしよし」

シロの兄弟たちもふわふわで可愛い。

ひとしきり撫でると、ようやく離れてくれた。

「ジグベッグさん、杖をありがとうございます」

「いやいや、お役に立ててよかった」

俺の新しい『緑龍の杖』。大事に使わせてもらいます。

全員センチイに乗り込み、ハイエルフたちに見送られて里をあとにした。

「いやあー、素晴らしい経験ができました!! アセナやワーウルフ族の村のみんなにいい土産話ができましたよ!!」

「そ、そうか……うっぷ」

俺は、早くも酔っていた。

センチイの背中に慣れる日は、まだまだ先みたいだ。

第三章 愛の言葉をきみに

新しい杖を手に入れたからといって、生活が変わるわけじゃない。

ハイエルフの里から帰って数日。新しい住民用の住居を作るために、エルダードワーフたちが作業をしている。

また、俺の薬院も並行して建設中だ。

フレキくんがワーウルフ族の村に薬院を建てたと聞いて、ちょっと羨ましくなった俺は、エルダードワーフのアウグストさんに相談した。前々から構想はあったとのこと、喜んで着工してくれた。

俺の意見が入った薬院。

診察室は広く、実験室や薬品庫を完備し、二階には俺の新しい部屋を作る。

なぜか図面には幼馴染のミュディと妹のシェリー、ローレイとクララベルの部屋もあったが……どこかで見えない力が働いてるような気がして、深くツツコめなかった。

建築予定場所は、現在の家のほぼ隣。

今の家と新しい家を渡り廊下で繋ぎ、今の家には銀猫族のシルメリアさんとミュアちゃん、

ん、魔犬族のライラちゃんに住む。余った部屋は、薬草幼女のマンドレイクと、アルラウネの個室にする予定だ。

食事などは今の家のリビングで食べ、個別の部屋は新しい家に作るという感じだ。

ちなみに、マンドレイクとアルラウネは個室を喜んでいた。

身体的な成長はないが、それぞれ個性が出てきた気がする。

マンドレイクは料理を習い始めたし、アルラウネはミュディから裁縫を習い、自分専用の前掛けやマンドレイクのためにエプロンなんかを作っていた。

ミュアちゃんも簡単な料理なら作れるようになったし、ライラちゃんも裁縫だけじゃなく、ドワーフから小物作りを習い、ブローチや髪留めを作ってシルメリアさんにプレゼントしていた。

子供の成長は速い……俺も温室の世話や実験以外の趣味を探そうかな。
そんなある日の休日。久しぶりにミュディと二人きりになった。



フレキくんの指導を終えた午後、俺は一人診察室で読書をしていた。

「アシュト、いる?」

「ん、どうしたミュディ？」

すると、左手を押さえたミュディが診察室に來た。

「あの、製糸場で指を切っちゃって……」

「見せて」

俺は読書を中断。ミュディが言い終える前に立ち上がって近付く。

手を取って見てみると、左手の人差し指が何かで挟んだように切れていた。

「……これ、ハサミで切ったのか？」

「うん。糸を切る時にちよつとね」

「痕が残ったら大変だ。すぐに治療ちりょうしよう」

「ん……ごめんね」

「謝あやまるなよ。ほら」

ミュディを椅子に座らせ、消毒をする。

「染しみるぞ」

「ん……つつ!!」

「よし、あとはハイエルフの秘薬を塗ぬっておしまい。このくらいなら明日には治なおつてるよ」

「うん、ありがとう」

左手の人差し指だけ緑色になったが仕方ない。

ハイエルフの秘薬の弱点は、見栄えが悪いことだな。

「仕事は終わりか？」

「うん。みんなに帰って休めて言われちゃった」

「はは、じゃあ……あ」

「……あ」

俺とミュディは同時に声を上げた。

そういえば二人きりだ。こんなの随分と久しぶりだ。

やばい、急に緊張してきた。

「あー……その、お茶でも飲むか」

「あ、わたしがやるよ」

「いいって。怪我けが人なんだし、ここは俺に任せろよ」

「……ん、ありがとう」

シルメリアさんは、銀猫たちの集会に参加しているからいない。

診察室にも、ティーポットやカップくらいならある。魔法で水を注ぎ、杖でティーポットを軽く叩くとお湯が沸わく。

「カーフィーと紅茶、どっちがいい？」

「じゃあ……紅茶で」

俺はカーフィー。ディミトリからもらった高級カーフィーが山ほどあるからな。紅茶とカーフィーを淹^いれ、紅茶の方をミュディに渡した。

「はい、熱いから気を付けて」

「うん。ありがと」

診察室のソファに移動し、ミュディと隣り合わせで座る。

カーフィーはほろ苦^いく上品な味わいだ。さすが高級品……

「ん……美味しいよ、アシユト」

「そうか？ はは、シルメリアさんが淹^いれればもつと美味しいんだけどな」

「ううん、アシユトが淹^いれてくれたから美味しいの」

「そ、そっか……」

無言でカーフィーを啜^する。なんというか……そわそわしてきた。

「そういえば昔、アシユトがお家のキッチンから果物をくすねてきて、シェリーちゃんと三人で食べたことあったよね」

「あー……そういえばそんなことあったな。あの時はリユドガ兄さんにバレて、こっぴどく叱^{しか}られたよ」

「ふふ、シェリーちゃんが泣いちゃって、リユドガさんが慌^わてて……」

「ああ。結局リユドガ兄さんが、謝^{あやま}っちゃったんだよね」

一番悪いのは俺なのにな。リユドガ兄さん……元氣かなあ。

「シェリーも、昔は可愛かったのになあ」

「今もすっごく可愛いじゃない。あんなに素直^{やす}くて可愛^{かわ}い子、そうはいないと思^{おも}うよ」

「うーん……俺からすると妹だし」

「ふふ、シェリーちゃんってすっごくモテたんだよ？ 貴族の間では、誰がシェリーちゃんのお婿^{むすめ}さんになるかで決闘になりかけたなんて噂^{うわさ}もあったしね」

「マジかよ……」

「でも、シェリーちゃんはお見合いを全部蹴^けって、お兄ちゃんを選んだんだよね」
確かに、シェリーは全てを捨ててここに来た。

でもそれは、ミュディにも当てはまることだ。

「なあ……ミュディは家を捨てたこと、後悔^{こうかい}していないのか？」

「うん、もちろん」

即答^{きこた}だった。思わずミュディの顔を見ると、真^まっ直^すぐ俺を見ていた。
目を逸^そらしてはいけない。そう思った。

「アシユト、わたしやシェリーちゃんが全てを捨ててここに来た理由、わかる？」

「……………うん」

そんなの、決まっている。

「わたしは……アシウトが大好きだから。一緒にいたいから。貴族の名前よりも、王国での暮らしよりも、アシウトが大好きだから、ここに来たんだよ」

「……ミュデイ」

「アシウト……アシウトは？」

「……俺だってそうだ。全部俺の勘違いで家出して……ミュデイが大好きだから、ミュデイと兄さんが結婚するところなんか見たくなくて……全て捨ててここに来た。大好きなミュデイを忘れて、イチから始めようとして……でも、ダメだった。ミュデイの顔がずっと残ってて、忘れられなかった。ミュデイだけじゃない。シェリーが大怪我して村に運び込まれた時は、本当に震えた……」

「……………」

俺は、言うべきことを言っていない。だから今、しっかりと言おう。

「ごめんミュデイ。俺の勘違いで大変な思いをさせて……危険な目にも遭わせた」

「いいの、本当に後悔していない。それに、こんな素敵な村で一緒に暮らせて、今とつても幸せなの」

「俺もだ。ミュデイやシェリーと一緒に暮らせて、とっても幸せだ」

ミュデイはそっと、俺の左手に自分の手を重ねた。



俺とミュデイの距離はとても近い。

心臓が、バカみたいに高鳴っている。

今なら……うん、今言わなくては!!

「ミュデイ、愛してる。俺と……俺と結婚してください!!」

「はい、わたしもアシュトを愛しています……結婚してください」
細くしなやかなミュデイの手は、とても熱かった。



ミュデイにプロポーズした夜……

俺は、家にたくさんの人を招いて食事会を開いた。

まず、ハイエルフトリオのエルミナ、メージュ、ルネア。エルダードワーフの 아우グストさんとフロズキーさん。サラマンダー族のグラッドさん。ハイピクシーのフィルにベルことベルメリア。ブラックモール族のポンタさん一家。デーモンオーガ二家。ローレライとクララベルだ。

人数が人数だからけっこう手狭だ。

ちなみに、俺は家に住人を招いてよく食事会をする。今回はこのメンバーだが、もちろ

ん別の種族や住人も呼ぶ。村内の交流はいっぱいしないとな。

リビングの壁際にテーブルをくっ付け、そこに料理を並べて自由に取る立食スタイルで食事をしている。

酒も入り、料理が少なくなってきたところで……

「みんな、ちょっと聞いてほしいことがあるんだ」

俺は、みんなの注目を浴びるような位置に移動し、ミュデイを呼ぶ。

ミュデイは照れながらも隣に立った。

「えー、実は俺、ミュデイにプロポーズしました!! ミュデイも受け入れてくれました。なので俺たち、夫婦になります!!」

パリンと、ガラスの割れる音がした。

落としたのは……エルミナだ。

室内がシーンとなり、全員がボカンとしている。

すると、シェリーが言った。

「お、お兄ちゃん、ミュデイにプロポーズしたの?」

「ああ、した」

「そ、そっか……おめでとう!! やっと結ばれたんだね、ミュデイ」

「シェリーちゃん……」

シェリーの祝福は嬉しいけど、どこか作り物みたいな笑顔だった。
 今度はローレライが前に出た。

「おめでとう、アシウト、ミュデイ。これで私も名乗りを上げられるわ」

「へ？」

「アシウト、私もあなたに結婚を申し込むわ。私も……あなたを愛しています。結婚してください」

「え、ろ、ローレライ？」

「やつぱり……ふふ、こうなると思った」

「みゆ、ミュデイ？」

「ず、ずるいずるい姉さま!! わたしだってお兄ちゃん大好き!! 結婚したい!!」

「く、クララベルまで……ちよ、落ち着け二人とも」

「落ち着いてるわ。ねえミュデイ」

「ええ、もちろん。アシウト、ローレライは本気だよ？」

わ、わけわからない。

確かにローレライは可愛いし、俺も好きだけど……夫婦になるとかの好きでは……ない、のか？

わからない……さすがに、いきなりは無理だ。

立ち読みサンプル はここまで

「すぐに答えを出さなくていいわ。でも、私にはあなたしかいない。アシウト、あなたを愛しているわ」

「ローレライ……」

「お兄ちゃん、わたしもお兄ちゃん大好き!!」

「クララベル……」

すると、少しずつみんなの声が聞こえてきた。

「おいおい村長よ、こんなべつびんさんの告白を断るとかねえよなあ？」

「あ、アウグストさん」

「そうだよ!! オーガ族の強い雄は、何人も奥さんを娶ってるんだからさ、村長もたくさん奥さん娶っちゃいなよ!!」

「の、ノーマちゃん」

「叔父貴。これも強い男の宿命。受け入れて差し上げてくだせえ」

「グラッドさんまで……」

「村長、モテモテなんだな」

「ボンタさん……」

うーん、みんなノリノリだ。酒も入っているからか、テンションが高い。

「おいアウグスト、村長の新しい家の間取り、図面を引き直せ!! こりや母ちゃんが山ほ